



人権啓発コーナー

公害問題・環境問題を学ぶ

氷川町人権啓発推進協議会の社会教育部会で、水俣病資料館と熊本県環境センターに視察研修に行きました。

水俣病は、工場から排水されたメチル水銀に汚染された魚介類などをたくさん食べることで起こったメチル水銀中毒です。1968年に公害病として認められましたが、今もさまざまな症状で苦しんでいる人々がいます。そして、差別や偏見、あらゆるわさが流され、著しく人権侵害を受けています。

私たちは、この水俣病が起きたことから公害問題・環境問題への大きな関心を持ち、水俣病に対する正しい理解と認識を深め、一人ひとりが環境を守る取り組みに力を入れましょう。



▲水俣病資料館

お知らせ

「高齢者の人権」がテーマにした人権啓発動画を上映します。
日時 11月11日(金) 13時30分～
場所 文化センター

問 生涯学習課 0965-5215860



八火図書館だより

76回目の読書週間の期間(11月9日まで)になりました。今年の標語は「この一冊に、ありがとう」で、心が震える読書体験や本に関わるすべての人への感謝を込めてあるそうです。図書館では、色んなジャンルの本を揃えています。まずは一冊手に取って、この機会に新しいことにチャレンジしてみませんか。

新着図書紹介

一般書

嘘つきジェンガ 辻村 深月
とんこつQ&A 今村 夏子
早番にまわしとけ キタハラ
ストレス脳 アンデシュ・ハンセン

児童書

ねずみくんはカメラマン なかえ よしを
タコとだいこん 伊佐 久美
その事件、こども弁護士におまかせ! 山崎 聡一郎
長い長い夜 ルリ

今月の「人」

ルーシー・モード・モンゴメリ

ルーシー・モード・モンゴメリは、カナダの小説家です。30歳で書き始めた「赤毛のアン」のシリーズが熱狂的な人気を呼びました。

生涯に20冊の小説と短編集を書きました。特に「赤毛のアン」は何度も映画化され、40か国語に翻訳されるなどの成功を収めました。

おすすめ図書

やっぴり食べに行こう。

原田 マハ

パリ、ニューヨーク、ロンドン、スペイン、ロシア、京都、蓼科…。いざ、アートと小説と美味探訪の旅へ!世界中の美味しい料理や旅行体験をまとめたエッセイ。



問 八火図書館 0965-6213489

お知らせ～読書感想文・感想画の募集～

八火図書館では、読書感想文と感想画を募集します。読後の感想を作文や絵で表現してください。指定図書はありません。募集要項や原稿用紙は、八火図書館のカウンターにあります。締切 12月2日(金) 提出 八火図書館(小中学生は各学校へ提出)



地域おこし協力隊 活動レポート 23



▲道の駅竜北開駅20周年記念のイベントが竜北公園で開催され、「ぶどうすくい」のお店を出店しました。



▲9月14日の学校給食は、私が考案した「もち粉入りお好み焼き」が出ました。「モチモチでおいしい」と子どもたちに好評でした。



▲9月の料理教室では、氷川町産のショウガとレンコンを使って「鶏むね肉のジンジャーめんつゆ漬け」など、4種類の料理を作りました。

料理教室～もち粉で作る水餃子、サツマイモ餃子～

日時 11月23日(水) 午前の部10時、午後の部13時30分(各定員10人)
場所 氷川町公民館 調理室 参加費 500円(当日徴収)
申込期限 11月16日(水)までに電話で申込み
持参物 エプロン、三角巾、マスク、タオル、保冷バッグ、水筒
申込先 地域おこし協力隊 蜂須(農業振興課内) ☎0965-52-5854



▲Instagram

町民文芸

投稿先: 〒869-4814 氷川町島地642番地 企画財政課宛 (毎月5日必着)

短歌

新築のまばらな庭のホンツゲを
愛でし母去り四十年
西上宮 村内 一誠
農ゆずり黄金の風もややさびしい
太き手の平にぎりしめおる
西野津 古崎 スエノ
澄み空の彼岸花の鮮む咲く
土手の道辺の秋色の香
西野津 古崎 栄子
我が町の名産梨を送らんと
物産館へと足を運び
吉本 高橋 澄子

俳句

庭褒めし母の形見のツゲ枯れる
西上宮 村内 一誠
初菜もむ塩のかげんとごまの香も
西野津 古崎 スエノ
一睡し血圧計る夜長かな
西野津 古崎 栄子
秋風や爽やかに揺らす洗い髪
吉本 高橋 澄子

「雪国」VS「山の音」

法道寺 本田 花風

そしてこれが最後のシーンである。「ある日曜の夕飯時、信吾は一家七人でもみじを見に行こうと提案、食事のあと、座敷からからす瓜が重そうに突っているのを見た信吾は、それを菊子に伝えるが、食器を洗う音で聞こえないようだった。」

「山の音」は凡て主人公信吾の心理を通して描かれているという点で一種の心理小説である。よって主人公のあり方を中心に見ることになり、テーマも無論そこから導き出される事になる。信吾の人間像およびその心境とは如何なるものであるか読み解けるのか、多分困難であろう。

「雪国」のフィナーレ、天の河が流れる鮮烈なシーンに比べると、この「山の音」のラストはなんと日常的で平穏を感じる家族の姿である。しかし、家族七人の食事後の場面で、信吾は菊子にだけ声を掛ける。信吾がはつきり手を出して妻の体に触れるのは、もういびきをとめる時くらいである。そんな六十二歳の信吾が、可憐な嫁の姿に若々しい恋心を揺さぶられる老人のくすんだ心境がラストに描かれている。

信吾は六十二歳で老人として描かれている。作品執筆中の川端は五十過ぎ、六十過ぎの信吾を描くにあたって川端自身も己に老人を感じていたのだろう。